

大石田の小雪のころ

すすき萩 活けて

薄茶を点てむかな

講演終えし由香さんのため

(R)

●●● 枯れ野のススキ

紅葉の山は装いを終え、向川寺の黄色い公孫樹(いちよう)は葉を落とし始め、風は「ヒュー」と、音を立てて吹くようになりました。

枯れ野の主役はススキでしょうか。イネ科の夏緑性多年草(地上部は冬には枯れる)、日当たりのよい山野の所々にまとまって株を形成して生育します。春先、ぐんぐん芽を伸ばし、夏には花穂を出し始め、お盆やお月見には花を供えご先祖様や神様の霊をなぐさめました。秋には金銀の穂を波打たせ、美しい風景を見せてくれました。ススキには狐が似合うと思いませんか。大石田には狐の昔話がたくさん残っています。葉の縁はざらざらしていて指を切りやすいので注意。雪囲い(そがき)やかやぶき屋根の材料に使われるススキは、古来より厳しい冬の寒さから家を守り、多くの恵みを与えてくれる頼もしい存在でした。秋の七草のひとつで、『万葉集』では茅、かや尾花とも呼ばれ「なびく心を穂に重ねる」と目に見えない情愛を表現しています。

素朴で地味な植物ですが、環境の悪い痩せた土地でも、ススキの繁殖で土は柔らかくなり、湿気を持ち、時間をかけて土地は栄養を取り戻します。枯れ野は今、次の年に向かって力をつけているところです。

●●●

虹蔵れて見えず(にじかくれてみえず)

11月22日～26日頃

小さかった頃、大工祝(太子講)という大きな行事がありました。朝から餅をついてご馳走を作っていました。床の間には聖徳太子の軸をかけ「指金」や「墨壺」などを並べ、生きた鯉・お神酒をあげ祭りしました。弟子さん達も朝から一升瓶を下げよばれて来て賑やかでした。職人の町大石田の古き良い思い出です。(と)

朔風葉を払う(さくふうはをはらう)

11月27日～12月1日頃

天気予報では2日から大荒れ。四国九州地方にも雪だるまマークが。昨年93歳で亡くなった父は、初雪の空を見上げながらしみじみと言ったもの。「オデントウサマ ハ ヨグ ワシェネモンダナー。」

町中が白く覆われ真綿のようにふんわりした気持ちになるのだが、現実が厳しい。寒さに負けず頑張っていこう。(木精)

橘始めて黄なり(たちばなはじめてきなり)

12月2日～6日頃

初雪の朝。子供の頃は大喜びでしたが、いつの間にかうんざりするようになっていました。老いてきた今は、「いよいよ降ってきたか。」という思いと、「これから始まる長い冬の暮らし」への緊張感が交じり合います。それでも晴れた日に枝に残った柿の実にかかる白い雪の情景に冬もいいなあと思うのです。(み)



2014.11.22 霜とヒメオドリコソウ・スズメノカタビラ

読書会だより⑧

大石田の小雪のころ

七十二候より

大石田町立図書館

吐く息が白くなった朝、畑へ行き春菊を摘みましました。霜が降りた葉は凍って白っぽく、ぱりぱりしていました。手がかじかんできましました。春菊の茎はぽきりと折れ、湯がいてみたら柔らかく、甘くなっていました。道端にある雑草さえ愛らしく見える時期です。